「断り」表現の分析方法
―― フェイス複合現象の紹介 ――

権　　英　秀

Abstract

This paper discusses the notion of Face Composition Phenomena that is proposed by the author and used for the analysis of refusal expressions. The merits of the notion of Face Composition Phenomena show:

1. When analyzing refusal expressions by using Face Composition Phenomena, it is possible to make some of the vague classifications of semantic formulas much clearer.
2. Face Composition Phenomena can analyze relations between semantic formulas and politeness more in detail.
3. Face Composition Phenomena can analyze linguistic performances of refusal speech act.
4. We can identify degrees of politeness in refusal expressions.

キーワード……意味公式(semantic formulas**)　ポライトネス(**politeness**)**
フェイス複合現象(face composition phenomena**)**

1.「断り」とは

「断り」とは、相手(依頼者・要求者など)の意図に応じず、断る側の領域(「自由にいたい」のような気持ち)を守る発話行為[1)]である。「断り」という発話は相手(依頼者・要求者など)との人間関係に影響を強く及ぼしやすいために、人間は普段「「断り」表現を表しづらい・断る場面に接したくない」と思うかもしれない。そのために、断る側は断った後のリスクを減らし「断り」を成功させるために、断る側は依頼者との諸関係を慎重に考慮した上で、「断り」を遂行しなければならない。相手との諸関係には、親疎関係、年齢層の差、発話内容(依頼・要求などの内容)などがかかわるであろう。

「断り」の先行研究では、母語話者と外国人学習者を対象に、「断り」ストラテジーである言語構造に焦点を当て、両側の「断り」に関する比較が多くなされてきた[2)]。「断り」の分析方法としては、Beebe et al.(1990)の「意味公式(semantic formulas)」と森山(1990)の「方略型」の１つの分析法が多く用いられている。この両分析法は言語形式に対する分析には適しているものの、「断り」表現そのものに対する言語使用や言語運用についての分析までには至りがた

く、「意味公式」と「方略型」の短所として指摘されてきた(任 2003、이 2003)。そのために最近は「ポライトネス」という語用論の観点から分析がなされはじめている。

しかし、「意味公式」や「方略型」の言語形式面と語用論からの言語運用面を分析する場合、「断り」の先行研究では言語形式面と運用面を関連付けて説明ができず、「意味公式」と「ポライトネス」は質が違うので同時に扱えないとも言われている(任 2003)。

本稿では、「断り」表現の分析における「意味公式」と「ポライトネス」を関連付けて同時に分析することを目標に、「意味公式」と「方略型」、そして「ポライトネス」の問題点を考察し、新しい「断り」の分析法(**「フェイス複合現象」**)を紹介したい。

2.「断り」の分析方法について

この章では、言語形式の分析法である「意味公式」と「方略型」、そして言語運用の分析法であるポライトネスを紹介し、問題点を考察する。

2.1 「意味公式」とは

「意味公式」は Beebe et al.(1990)によって提案された、「断り」をより細かく分類した「断り」ストラテジーである。これは「方略型」よりも多くの研究者から使用されている事実が示すように、「断り」表現の分析には欠かせない分析法である。Beebe et al.(1990)は「意味公式」を次のように下位分類している。

表１ Beebe et al.(1990)意味公式の分類及び例文(例文は著者訳)

意味公式	例文
Ⅰ. Direct（直接的断り）	
A. Performative（遂行動詞を使う直接断り）	“I refuse”「断る。」
B. Non－performative Statement （遂行動詞を使わない直接断り） 1. “No”（否定の副詞だけを使う） 2. Negative Willingness/Ability （やる気や能力の否定）	1.“No”「いいえ。」 2.“I can't.”“I won't.”“I don't think so.” 「できない。；したくない。；そうは思わない。」
Ⅱ. Indirect（間接的断り）	
A. Statement of Regret（謝罪・遺憾な気持ち）	“I'm sorry...”;“I feel terrible...”「すまない。；悪い。」
B. Wish（願望）	“I wish I could help you...” 「手伝ってあげたいんだけど。」
C. Excuse, Reason, Explanation （言い訳、理由、弁明）	“My children will be home that night.”; “I have a headache.” 「私の息子はその夜に家にいる。；私は頭痛がする。」
D. Statement of Alternative（代案提示） 1. I can do X instead of Y （Y の代わりに、X ができる） 2. Why don’t you do X instead of Y （Y の代わりに、X をしたら？）	1.“I'd rather...”“I'd prefer...” 「私ならこうする。；私はこっちの方がすぎだ。」 2.“Why don't you ask someone else? 「他の人に聞いてみたら？」

E. Set Condition for Future or Past Acceptance （何々なら将来引きうけるあるいは何々ならあの時引きうけたのにという条件を提示すること）	“If you had asked me earlier, I would have...” 「もし、もっと早く頼んでいたら、・・・がしたのに。」
F. Promise of Future Acceptance （将来なら承知するという約束）	“I'll do it next time”;“I promise I'll...”or “Next time I'll...” 「今度はする。;～すると約束する。;今度～する。」
G. Statement of Principle（信念の陳述）	“I never do business with friends. ” 「私は友達と取引は絶対しないんだ。」
H. Statement of Philosophy （人生観・決まり文句）	“One can't be too careful.” 「人間はいくら用心しても、しすぎることはない。」
I. Attempt to Dissuade Interlocutor （相手を思い止らせようという試み） １．Threat or Statement of Negative Consequences to the Requester （脅し・依頼者にとって否定的な結果の陳述） 2. Guilt Trip （依頼者に罪の意識を持たせる） 3. Criticize the Request/Requester, etc. (Statement of Negative Feeling or Opinion) ;Insult/Attack （依頼/依頼者への批判（否定的感情や意見の陳述）；侮辱/非難 4. Request for Help, Empathy, and Assistance by Dropping （依頼を辞めさせたり、控えさせたりすることによって、助け、共感、援助を訴える） 5. Let Interlocutor off the Hook （話し手の負担を軽減する） 6. Self-Defense（自己防衛）	1.“I won't be any fun tonight”to refuse an invitation. 「招待の「断り」として、「今夜私がいても面白くないだろう。」 2. waitress to customers who want to sit a while ;“I can't make a living off people who just order coffee.” ゆっくりとするお客に対してウエイトレスが「コーヒーだけ注文するお客様だけでは、私は生活ができません。」 3.“Who do you think you are?”; “That's a terrible idea!” 「自分を何さまだと思っているのか。;なんてひどい考えなんだ！」 5.“Don't worry about it.”“That's okay.”“You don’t have to.” 「心配しないで。;大丈夫だ。;しなくてもいい。」 6.“I'm trying my best.”“I'm doing all I can do.”“I no do nutting wrong.” 「私は頑張っているんだ。;できるだけのことはやっているんだ。;私は間違ったことはやっていない。」
J. Acceptance that Functions as a Refusal（「断り」の働きを有する承諾） 1. Unspecific or Indefinite Reply（明確でなく、不確定な返事） 2. Lack of Enthusiasm（熱意の欠如）	
K. Avoidance（回避） 1. Nonverbal（非言語的） a. Silence（沈黙） b. Hesitation（躊躇） c. Do nothing（何もしない） d. Physical Departure（その場を離れる） 2. Verbal（言語的） a. Topic Switch（話題転換） b. Joke（冗談） c. Repetition of part of Request, etc. （依頼の一部を繰り返す） d. Postponement（延期） e. Hedging（ヘッジ＝言葉を濁す[3)]）	c.“ Monday?”「月曜日？」 d.“I'll think about it.”「考えておきます。」 e.“Gee, I don’t know.”“I'm not sure.” 「うん、分からない。;確信できない。」
Adjuncts of Refusals（断りへの付加的表現）	

1. Statement of Positive Opinion/Feeling or Agreement（積極的な意見/感情、同意の陳述）	“That's a good idea...”;“I'd love to...” 「それはいい考えだけど。;私も…やりたいんだけど。」
2. Statement of Empathy（共感の陳述）	“I realize you are in a difficult situation.” 「あなだが大変な状況にいるのは分かるんだけど。」
3. Pause Fillers（間を持たせる表現）	“uhh”“Well”;“oh”「え～と、え～；うん、あのう」
4. Gratitude/Appreciation（感謝/謝意）	

「意味公式」は上記のように、「断り」表現をより細かく分類したものであり、「断り」の言語構造が分析できる長所がある。しかし、「意味公式」には次のような問題点が現れる。

①「断り」表現を意味公式に分類する際、曖昧な分類がある。
②分類された「意味公式」の言語使用に関する説明が画一化される場合がある。
③西洋人向けの分類基準であり、アジア人を対象にした場合、当てはまらない意味公式がある。

まず、「断り」を「意味公式」に分類する際、２つの分類に分かれる場合がある。

例[4)]1）父の「洗濯の要求」－娘の「断り」
父：洗濯機回しといて！
娘：**めんどくさいよ**。（**「直接的断り・理由」**）

例 2）兄の「ものの買出しの要求」－弟の「断り」
兄：お菓子と飲み物適当に買ってきてくれない。俺今レポート忙しいんだけど。
弟：何！なんで俺が行かなきゃいけないんだよ。**自分でいけよ**。
（「非難」＋**「非難・代案提示」**）

例 3）兄の「ものの買出しの要求」－弟の「断り」
兄：お菓子と飲み物適当に買ってきてくれない。俺今レポート忙しいんだけど。
妹：いやだ。
兄：そこをなんとかしてよ。お願い！
妹：**いやだって**。（**「非難・直接的断り」**）

例 1 から 3 までの「断り」は 2 つの意味公式が考えられる。例 1 の「めんどくさい」は、洗濯することをやりたくないという気持ち（「断り」の意）を表す「直接的断り」にも、「直接的

断り」の理由として「理由」の意味公式にも分類できるであろう。たとえば、“あれはめんどくさいからやりたくない”のように、「やりたくない」とあからさまに「直接的断り」を表しており、「めんどくさい」の後ろに因果関係を表す接続助詞が来た場合は、「めんどくさい」は「理由」になる可能性が高い。しかし、例１の「断り」では「めんどくさい」のみによって断られており、「直接的断り」と「理由」意味公式の両面の意味に分類される可能性があるであろう。

例 2 の場合、兄から「ものの買出し」を頼まれた弟の「断り」である。弟は最初「非難」を使用して物を買いに行きたくない気持ちを表している。その後、弟は強い口調で「自分でいけ」と断っている。「自分でいけ」というのは「食べたいのなら自分で行って買ってきた方がいい」のような意味であれば、相手へ責任を転嫁する「代案提示」になるであろう。しかし、「自分で行け」の前に「非難」の意味公式が現れており、それと関連付けると、「自分でいけ」という「意味公式」は相手への「非難」にもなる可能性がある。

最後に例 3 では 1 回目の「断り」として、「いやだ」という「直接的断り」で断っているが、「直接的断り」を受け入れられず、再び要求する相手（兄）に対して、妹は「いやだって」と断り続けている場面である。2 回目の「いやだって」は、「いやだ＋って」という 1 回目の「断り」を引用する言語形式になっている。これは「非難」であろうと言えよう。しかし、他にも、「直接的断り」を再度言わせており、含意[5)]としては「いやだ」という「断り」の意味を言葉で表す「直接的断り」が現れているために「直接的断り」としての分類も可能な場合である。

2 つ目は分類された「意味公式」の言語使用に関する説明が画一化される問題である。

例 4）弟の「お金の要求」－兄の「断り」

弟：お兄ちゃん、5 千円あれば、貸してくれない。

兄：**わりぃ**。　（**「謝罪」**）

例 5）親しい友達の「お金の要求」－親しい友達の「断り」

友達：＊＊、あのう、今月お金がやばくて、、、5 千円あれば貸してくれない。

友達：**わるい**。貸してあげたいんだけど。ちょっと俺もやばくて、**ごめんね**。

（**「謝罪」**＋「積極的陳述」＋「理由」＋**「謝罪」**）

「謝罪」は相手に何かマイナス的な行動(誤り)を起こしたことに対するお詫び(謝り)であり、相手を傷つけたことに対する言葉の補償である。そのために「断り」における「謝罪」も、相手の意図に添えなく、相手にマイナス的な行動を起こしたことに対する補償として分析されてきた。しかし、「断り」における「謝罪」は、例 4、5 のように、相手にとってマイナス的な行動に対するお詫びでない場合もある。例 4 は弟の「お金の要求」に対する兄の「断り」である。

兄は「わるい」という「謝罪」意味公式で断っている。しかし、兄は弟の要求に応じられなかったという理由だけのために、傷ついた弟に対した補償としての「謝罪」を使用したとは限らない。ここでは、「相手は年下だし、5 千円の貸し借りは学生である兄としても高いお金である」という思い込みから言うと、「謝罪」は相手のためではなく、断る側のお金を守る(お金を貸さない)行動[6)]として解釈できるであろう。

例 5 は本来の「謝罪」の働きのように相手に働きかけている場合である。しかし、依頼者の「断る側は友達であり、親しいからお金の要求ができる」という(プラス的な思い込み[7)])による依頼に対する「謝罪」の意味公式は、誤ったことに対するお詫びとは違って、相手のプラス的な思い込みに対する「謝罪」である。そのために例 5 の「謝罪」は断る側が要求者の思い込みのために配慮した「断り」意味公式だと考えられる。さらに他の意味公式との組み合わせと関連してみても、例 4 は「謝罪」のみで断れているが、例 5 は「謝罪」以外にも「積極的陳述」、「理由」も現れており、要求者に初出の「謝罪」と一緒に「積極的陳述[8)]」によって、せっかく要求してきた相手のプラス的な思い込みに働きかけている。その後断る側は相手から「断り」の事情を分かってもらおうと「理由」を言いながら再度「謝罪」を行い、相手に誤って謝るのではなく、相手の面子を立ててあげようとする意図が覗かれる。

このように各「意味公式」は「断り」における意味(言語使用)と、本来の言葉が持っている一般的な意味が異なる場合があり、その「言葉の意味」における二重性に注意を払わなければならないと思う。この考察はさらに 2.3 節で詳しく述べよう。

最後に「意味公式」は西洋人の「断り」を分析するために作られたものである。そのために日本人、韓国人などアジア人に当てはまらない意味公式も少なくない[9)]。Beebe et al.（1990）の意味公式の中において、Self-Defense（自己防衛）や Gratitude/Appreciation（感謝/謝意）などはアジア人の「断り」表現にはほとんど見られないであろう。

2.2 「方略型」とは

「意味公式」が英語の代表的な「断り」の分析法といえば、「方略型」は日本語の代表的な「断り」の分析法として知られている。「意味公式」と同様に「断り」の言語構造などを調べるには適しているが、下位分類が 4 つの方略型に分かれているために、「断り」をより詳しく分析できない短所がある。ここでは簡単に方略型を紹介する。

表 2　森山(1990)の方略型

断り型	方略	参考
嫌型 はっきり「やりたくない	率直表示の方略 （断りたい意向を）率直に言	誠実原則：対人関係において誠実であるべきである。

（あるいはいやだと）と言う	え	
嘘型 「都合がつかない」と言う	帰属置換の方略 相手の意向に沿えない理由を自分の意向に帰属させるな	相手利益優先：自分の利益よりも相手の利益を優先するように振舞うべきである。
延期型 「考えておく」と言う	延期の方略 態度表明を延期せよ	① 依頼の場面での緊張関係を避ける。 ② 嫌型より何らかの保全策は取られる。 ③ 対人関係を配慮した断り方。
ごまかし型 笑ってごまかす	ごまかし方略 依頼行為を無化せよ	① 依頼場面を回避する極端な場合に使う。 ② 依頼行動そのものをないがしろにすることにもなる。 ③ 目上に対して用いられることはほとんどない。

2.3　「ポライトネス(politeness)」とは

1970 年代後半から語用論の分野でポライトネスへの関心が非常に高まり、語用論研究に欠かせないほどになってきた。初期のポライトネスは Rintell(1979)、Walters(1979)、Fraser(1990)などによって発話レベルの現象に焦点を当てて研究された。特に Walters(1979)は「標準的語彙」を用いて調査対象者がポライトネスをどう感じ取るかを調べた。しかし、このような調査・理論は、発話行為を丁寧なものにしたり、そうでなくしたりする要因は言語形式のみではなく、言語形式とそれが発話される状況、相手との関係、発話の内容なども重要な要因である点を十分に踏まえていなかった。そのため、近年になって Leech(1983)や Brown & Levinson(1987、以下 B&L)、宇佐美(2002)などの研究者によって、語用論的現象としてのポライトネスを研究することの重要性が指摘されるようになった。

Leech(1983)はポライトネスを「人はなぜ、言いたいことを伝えるのにしばしばそんなにも間接的であるのか」を説明するのに欠かせない概念であるとし、「協調の原則を救うもの」として複数の行動指針を導入し、ポライトネスの原則「(いろいろな事柄が同じだとして）無礼な考えはできるだけ小さく表現し、礼儀正しい考えはできるだけ大きく表現せよ」を提案した。Leech は、これによって、Grice(1967)の「協調の原則」で説明できない例外などをうまく説明できると見なしている。

ポライトネスに関して最も大きな影響を持っているのは B&L(1987)のポライトネス理論であると言われる。B&L は Goffman(1976)が提唱した「フェイス(face)[10)]」の概念を利用して、２つの「フェイス」である positive face(積極的フェイス)と negative face(消極的フェイス)に

分けて分析している。B＆L の 2 つのフェイスは次のようなものである。宇佐美(2002)の考え方も同時にまとめて下記に示す。

表 3　フェイスの定義(①B＆L の定義(著者訳)、②宇佐美の定義)

① negative face :the want of every ‘ competent adult member ’ that his actions be unimpeded by others. （消極的フェイス： 自分の行動が他人に妨げられたくないという大人の欲求） ② 他者に邪魔されたり、立ち入られたくない、つまり、「他者と一定の距離を起きたい」、ここから先へは踏み込んでほしくないという「マイナス方向に関わる欲求」である。
① positive face : the want of every member that his wants be desirable to at least some others. （積極的フェイス：自分の欲求が少なくとも何人かの人にとって望ましいものであって欲しいという構成員の欲求。） ② 他者に理解されたい、好かれたい、仲間だとみなされたい、つまり、「他者に近づきたい」というプラス方向への欲求である。

このようなフェイスに対して、「相手のフェイスを脅かすか否か」ということを発話行為の枠組みと、「ある種の行為は本質的にフェイスを脅かす恐れがあるため、それを和らげる手段が必要である」というポライトネスの理論に基づいて研究されている。つまり、人間は発話行為において、相手の positive face や、negative face を傷つけたり、破ることがあり、逆に自分の positive face や、negative face を傷つけたり、破ることもあるとされる。このようなフェイスを傷つける可能性が人間のコミュニケーションには潜在的にあるのだと指摘されている。そのため、相手または自分のフェイスを脅かす行動(Face-Threatening Acts：FTA)の可能性を無くすために、会話の参加者は何らかのストラテジー(strategies)を使用するのである。このストラテジーは話し手の選択であり、会話の場でさまざまな要素（相手・会話内容・置かれた状況など）によって判断される。したがって、B&L は話し手の FTA の見積もり[11)]（weight―相手のフェイスを脅かす度合い）を測るために、次のような要素を設定した。

D ： 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)との「社会的距離(Social distance)」 P ： 聞き手(hearer)と話し手(Speaker)との間で生じる「支配力(Power)」 Rx ： ある行動が相手にかける負荷度「負担の大きさ(absolute ranking of imposition)」

B＆L（1987：76）は上の要素を用いて「ある発話行為（x）が相手のフェイスを脅かす度合い」、すなわち、行為（x）が相手のフェイスを脅かす度合い（W）を測ることができると公式

化している。この公式は次のようである。

$$Wx = D(S,H) + P(H,S) + Rx$$

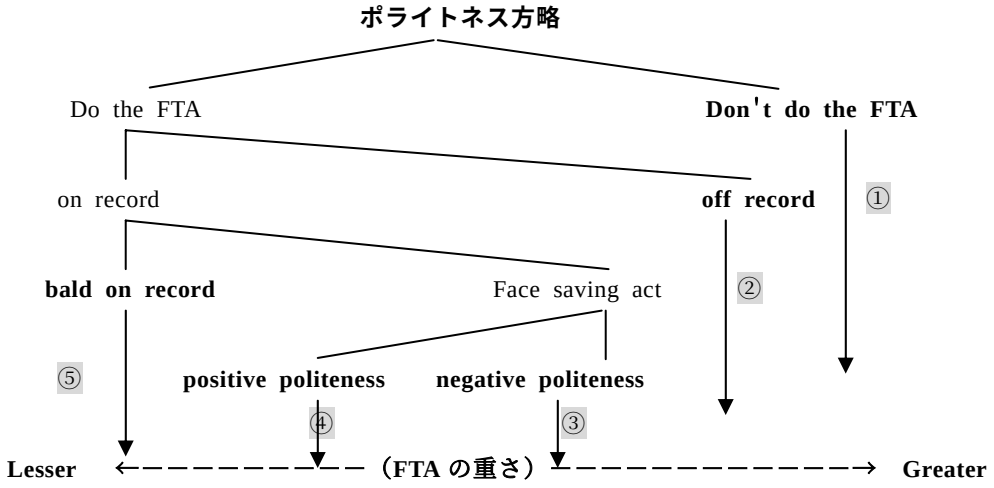
この公式は、FTA の見積もりを 3 つの要素である社会的距離(D)と支配力(P)、そしてある行動である(x)の負担の大きさ(Rx)との三要素により、関数的に決定しようとするものである。話し手が聞き手を考慮して、FTA を軽減し、コミュニケーションを円滑にするために、B&L は「ポライトネス・ストラテジー」と呼ばれる方略を提案し、次のように 5 つに分類している。

① FTA を行わない：事柄がフェイスを脅かす可能性が極めて高いので、あえてそれを行わない方略である[12)]。
② off record：事柄に対して直接に言わず、ヒントや連想の手がかりを与えたり、皮肉・比喩を使ったり、ほのめかしたり表に出さない方略である。
③ negative politeness：他の人から邪魔されたくない、抑えつけられたくない、行動を自由に選択したいといった欲求に配慮したポライトネスである。いわゆる negative face に訴えかけるストラテジーである。
④ positive politeness：他の人に好かれたい、認められたい、評価されたいといった欲求に配慮し、映ったポライトネスである。いわゆる positive face に訴えかけるストラテジーである。
⑤ bald on record：単刀直入に事柄を言う何も緩和策を講じない方略である。

5 つのストラテジーと「断り」の主な「意味公式」を形式に基づいて分類すると次[13)]のようである。

①：沈黙(・・・)、笑い(ハハハ)
②：批判(このやろう)、条件提示(＊＊日ならできますけど)、感嘆詞
③：情報要求(お母さんは何をなさいますか)、ヘッジ(私はちょっと)、繰り返し、謝罪(ごめんなさい)
④：積極的陳述(事情は分かるんだけど)、冗談、約束(後で連絡しよう)、言い訳(時間がない)、呼称(＊＊先生)、代案提示(＊＊に頼んだら)
⑤：直接的断り(嫌だ)

図１　ポライトネス・ストラテジーと「意味公式」の相関関係



「断り」の「意味公式」における短所を補うために、先行研究ではポライトネス理論によって言語使用や運用などを分析している。しかし、上記のように「意味公式」とポライトネス・ストラテジーを同一化して分析しているために、「意味公式」の言語使用の説明が画一化される恐れがある。さらに、このような問題点は B&L のフェイスの概念に対する捉え方からも覗うことができる。

例 6）先生の「学会の手伝いの要求」－学生の「断り」

先生：え～と、12 月 21 日に学会があって、ちょっと手伝ってほしいんだけど、
空いている時間でいいから手伝ってくれないか。

学生：申し訳ありません。その日バイトがありまして、**忙しい**んですけど。

（「謝罪」＋**「理由」**）

例 7）兄の「ものの買出しの要求」－弟の「断り」

兄：お菓子と飲み物適当に買ってきてくれない。

弟：えっ、**忙しい**よ。　（**「理由」**）

例 6 と 7 の「断り」では、「忙しい」という自分の事情を説明しながら断っており、先行研究では、「理由」に対する言語運用はすべて断る側の positive face を念頭に行っていると分析している(熊井 1993、療 2004 など)。例 6 の「忙しい」は図 1 の「理由」のように、学生は「学会がある日にバイトのせいで忙しいから手伝いはできない」という「断り」を先生に伝え、先生から「断り」の事情を分かってもらおうとしている。これは先行研究の分析と同様に、断る

側が自己イメージのために用いた「理由」であろう。

しかし、例 7 の場合は、兄の「ものの買出し」について、断る側が置かれている事情である「忙しい」ことを分かってもらおうつもりではなく、断る側が「現在忙しい環境にいるから兄の「ものの買出し」には応じない・応じたくない」という断る側の領域、「要求に従わず、自由にいたい」である negative face に働きかけていると見なされる。さらに次の例においても「意味公式」とポライトネス・ストラテジーの同一化によって言語使用の単純化になりがちなケースが現れる。

例 8）先生の「学会の手伝いの要求」－学生の「断り」

先生：え～と、12 月 21 日に学会があって、ちょっと手伝ってほしいんだけど、
空いている時間でいいから手伝ってくれないか。

学生：あのう～、ちょっとできないのですが、すみません。**＊＊君はその日大丈夫大と思いますが、頼んでみましょうか**？　（「直接的断り」＋「謝罪」＋**「代案提示」**）

例 9）父の「洗濯の要求」－息子の「断り」

父：洗濯回しといて！

息子：パス。**あっちに暇そうなやつにやらせば**。　（「直接的断り」＋**「代案提示」**）

「代案提示」は相手と一緒に解決案を模索しあって、相手に解決策を教えるストラテジーである。そのために、相手の positive face に働きかけるものとして先行研究では分析されている。例 8 において、先生は学生に「相手は年下であり、弟子であるために、相手に学会の手伝いを頼める」と思い込んで positive face に働きかけて要求しているが、学生は手伝いの出来ない状況でいるために、「断り」の代わりに先生の positive face に働きかけようと他の解決案を出している。これは図 1 のとおりに positive face を念頭においたストラテジーである。

しかし、例 9 では異なった「代案提示」が現れる。父の洗濯要求に対して、息子は「直接的断り」を用いた後、「代案提示」を使用しているが、ここでの「代案提示」は断る側に押し付けられた責任を単に第 3 者に転嫁させる働きであろう。「私はやりたくないから、他の人(弟)にやらせろ」という断る側の negative face を守ろうとすることが分かる。

B＆L(1987)は「断り」発話行為について、相手の依頼から断る側のフェイス(依頼者の要求・依頼などに応じず、自由にいたい)である negative face を守る行為であると述べている。しかし、「断り」には negative face に働きかける「意味公式 or ポライトネス・ストラテジー[14)]」以外にも、付加的(「断り」意味を表す部分以外のもの)に使用されるものがある。言い換えれば、「断り」表現の中では断る側の negative face 以外にも、断る側の positive face や依頼者のフェイスに関わる部分もあり、「断り」の中に単数のフェイスを念頭に何らかのポライトネスを使用するのではなく、さまざまなフェイスによって、「断り」の発話行為を遂行すると考えられ

る。これについて、Tomas(1995)や宇佐美(2002)、権(2007b)なども指摘しているように、B&Lのフェイスの概念には再考察の余地がある。次の例を見よう。

例 10）弟の「お金の要求」－姉の「断り」

弟：お姉ちゃん、今月お金やばいから一万円貸してくれない。

姉：<u>え～いやだ</u>。<u>あたしもほしいものがあってさ</u>。<u>今度お金できたら貸してあげるよ</u>。

(「<u>直接的断り</u>」＋「<u>理由</u>」＋「<u>約束</u>」)

姉は弟から「お金の要求」をうけて、「断り」の初出からアカラサマに断ることから、姉のお金を守ろうとし、自身の negative face に働きかけていることが分かる。この「直接的断り」は、B＆L（1987）の述べる negative face に働きかけた negative politeness であろう。しかし、「直接的断り」の後ろは、negative face を念頭においた「意味公式」以外に、なぜ negative face に働きかけたかを相手に分かってもらおうと「理由」を説明している。これは相手から認めてほしい、よく見られたいという気持ちである positive face にあたると思う。さらに“<u>今度お金できたら貸してあげるよ</u>”のように相手にわざわざ約束を言い出すことによって相手の面子を立ててあげようとする意図が見られる。この部分は「姉は家族であるし、自分(弟)よりお金があるだろう」という思い込みから要求してきた依頼者の positive face に対する配慮であろう。

よって、弟からの要求に対して、姉は自分の positive face、negative face、さらに相手(姉)の positive face まで考慮したフェイスの組み合わせで「断り」を遂行している。即ち、1 つの「断り」発話行為の中では、「断り」の部分である negative face 以外にも、さまざまなフェイス作用が行われることが分かる。特に「断り」発話行為は、相手の意図を断る側が遂行してあげることではなく、自分の立場や自由を守ろうとする **negative politeness** に近いものであるが、その中にはさまざまなフェイス(断る側や依頼者の positive face)が組み合わされる場合があると言えよう。

3．フェイス複合現象の紹介

例 10 のように、「断り」表現には「断り」の意図を言葉で表す**「直接的断り(Do the FTA)」**と「直接的断り」の前後にくる諸意味公式(**「間接的断り」**)の組み合わせで構成されている。これに対して、Beebe et al.（1990）は「断り」の構成について、「直接的断り（Direct)」と「間接的断り（Indirect)」の組み合わせによって「断り」が成り立つと分析している。これは「断り」に、断る側の negative face に働きかける部分（「断り」の意味が入っている所、**「直接的断り」**にあたる）と「直接的断り」以外の「(間接的な）断り」との組み合わせと見られる。そして Olshtain ＆ Cohen（1983）も発話行為における言語表現は１つもしくはそれ以上の一連の意味公式から構成されていると指摘している。

つまり、「断り」表現の中では断る側の negative face 以外にも、断る側の positive face や依頼者のフェイスに関わる部分もある可能性は否定できない。したがって、このような 1 つの発話にフェイスが複数現れるのを**フェイス複合現象**と定める。

フェイス複合現象とは発話行為の中で現れるフェイスの組み合わせである。発話のフェイス複合現象の下位分類は次のようにまとめる。

表 4　フェイス複合現象の分類

フェイス	定義	下位分類
speaker's face or **selfish-face**	発話の中で、話し手が自分のフェイスのみを考慮した場合。	話し手の positive face
		話し手の negative face
		話し手の semi face[15)]： 話し手の positive face＋話し手の negative face
mutual face	発話の中で、話し手が相手(聞き手)のフェイスを考慮しながら、話し手のフェイスも考慮した場合。	聞き手の positive face＋話し手の positive face
		聞き手の positive face＋話し手の negative face
		聞き手の negative face＋話し手の positive face
		聞き手の negative face＋話し手の negative face
		聞き手の semi face＋話し手の positive face
		聞き手の semi face＋話し手の negative face
		聞き手の positive face＋話し手の semi face
		聞き手の negative face＋話し手の semi face
		聞き手の semi face＋話し手の semi face
hearer's face	発話の中で、話し手は話し手のフェイスを押さえて相手(聞き手)のフェイスを主に考慮した場合。	聞き手の positive face
		聞き手の negative face
		聞き手の semi face

すべての発話には上記のようなフェイス複合現象の下位分類が当てはまるとは言えないのであろう。たとえば、「断り」表現においては、依頼者の negative face に傷つけるような場合はないからであろう。依頼および要求などを相手(断る側)に受け入れてもらうために、一所懸命に依頼者は働きかけるので、依頼者自身の negative face を念頭に依頼したり、要求したりするケースは一般的にあるとは考えられない。

もし、negative face を念頭に依頼または要求が行われても、その negative face は相手である

断る側のフェイスにあたると考えられる。即ち、依頼者は相手の領域(自由にいたい。要求などに応じたくない)を侵しながら、依頼または要求をすることになるので、相手の損傷される negative face を保持しながら働きかけることになる。そして損傷された negative face は断る側の「断り」によって、補償されるので、「断り」におけるフェイス複合現象では、断る側が依頼者への negative face に働きかけるフェイス複合現象は排除できる。

さらに、これまで「断り」表現を negative face による negative politeness として規定するのではなく、「断り」である negative politeness のためにさまざまなフェイスを組み合わせた「断り」によって、断る側の円滑なコミュニケーションを達成しようとするストラテジーと定義したい。人間がこのように一つの「断り」を遂行するためにさまざまなフェイスを組み合わせて行う理由は、「断り」が非常に人間関係に影響を与えるために、相手のフェイスや断る側のフェイスなどによって断った後のリスクを減らし、達成する目的で工夫されるからであろう。

表 5　「断り」におけるフェイス複合現象

「直接的断り」		フェイス	下位分類
on (「断り」の意味を言葉で表す場合) or **off** (「断り」の意味を言葉で表さない場合)	＋	**speaker's face**[16]	断る側の positive face
			断る側の negative face
			断る側の semi face
		mutual face	依頼者の positive face＋断る側の positive face
			依頼者の positive face＋断る側の negative face
			依頼者の positive face＋断る側の semi face
		hearer's face	依頼者の positive face

4．フェイス複合現象の適用

この章では、フェイス複合現象を実際の「断り」の例に当てはめて考察してみる。

例 11）親しい先輩の「ものの買出しの要求」－親しい後輩の「断り」

先輩：お菓子と飲み物適当に買ってきてくれない。

①後輩：ちょっと今授業がありますので、行けないのですが。

(「直接的断り」＋「理由」)

「直接的断り」を伴いながら(on)＋speaker's face **の「断る側の** positive face**」**

②後輩：ちょっと今授業がありますので。　（「理由」）

「直接的断り」を伴わず(off)＋speaker's face **の「断る側の** positive face**」**

例 11 の①では、「断り」の正当化のために「理由」を持って相手に分かってもらおうとしながら、最後に「直接的断り」によって「断り」を示している。断る側は「断り」の意味を持ち出すために、断る側の positive face である「理由」をワンクッションのように使用したと思う。即ち、「直接的断り」である negative face のみに働きかけて断ると相手に悪いイメージを与えるために、断った後のリスク(先輩との関係が悪くなる)を考慮した断る側の戦略として、断る側の positive face に働きかけた「理由」である。

しかし、②では「断り」の事情を先輩に理解してもらい、自ら「要求」をやめてもらおうとするために、「理由」のみで「断り」が遂行されたと思う。これは、①のように「断り」の意味をずばりという場合より、断った後のリスクは低いかもしれない。よって、先輩の「ものの買出し」に対して、①の後輩の「断り」である negative politeness は、②の後輩の「断り」における negative politeness より自分の negative face を念頭においた度合いが強いと考えられる。

例 12）先生の「学会の手伝いの要求」－学生の「断り」

先生：え～と、12 月 21 日に学会があって、ちょっと手伝ってほしいんだけど、
空いている時間でいいから手伝ってくれないか。

①学生：う～む、ちょっとそのバイトがありまして、ちょっと無理だと思います。
本当にすみません。すみません。　（「理由」＋「直接的断り」＋「謝罪」）

「直接的断り」を伴いながら(on)

＋mutual face **の「依頼者の** positive face**＋断る側の** positive face**」**

②学生：いやっ、申し訳ありません。その日先約があるんですけど。（「謝罪」＋「理由」）

「直接的断り」を伴わず(off)

＋mutual face **の「依頼者の** positive face**＋断る側の** positive face**」**

例 12 の「断り」は先生からの「学会の手伝い」の要求である。①の学生は最初「理由」を用いて、「断り」の正当化を前置きにし「直接的断り」によって断り続けて、断る側の speaker's face に働きかけている。これは、例 11 の①と同じパターンである。しかし、例 12 の①の学生は「相手は年上であり、先生である」という人間関係、そして「学生は年下であり、弟子であるために学会の手伝いは頼める」と思っている先生の positive face などにも配慮し、「謝罪」を用いて断っている違いが見られている。

②の学生も①の「断り」と同じく、「謝罪」が使用されており、先生の positive face を立て

ようとすることが見られているが、②の「断り」には「断り」の意味を言葉で表さずに、「謝罪」と「理由」だけで行われているために「断り」のことを分かってくれることを相手に期待していることが分かる。すなわち、②の学生は要求の撤回も要求した相手に任せており、「断り」のリスクを減らそうとしていることである。さらにこれは「謝罪」の言葉からも覗かれる。①の学生は「すみません」という「謝罪」を表しているが、②の学生はより丁寧さがある「申し訳ありません」の方を用いている。②の学生は相手との諸関係から「断り」の負担度が高くなったために、相手との関係を維持しながらなるべく丁寧に断ろうとするフェイス複合現象が見られる。

例 13）親しくない後輩の「発表原稿のチェック」－親しくない先輩の「断り」

後輩：先輩！明日ゼミの発表があってその資料作りをしてるんですけど、このテーマについて、先輩がくわしいと聞きましたので、この発表原稿に目を通してチェックしていただきたいんですが。

①先輩：ごめん、後にしてくれない。（「謝罪」＋「回避」）

「直接的断り」を伴わず(off)

＋mutual face の「依頼者の positive face＋断る側の negative face」

②先輩：えぇ～、ごめん、別に詳しくないし・・・。（「謝罪」＋「理由」）

「直接的断り」を伴わず(off)

＋mutual face の「依頼者の positive face＋断る側の negative face」

例 13 は親しくない後輩からの「発表原稿のチェック」の依頼である。①の相手と親しくない先輩は「謝罪」と「回避」によって断っている。まず、①の断る先輩は「親しくないが、先輩に文書を必ず見てもらいたい」という positive face に働きかけてきた後輩のフェイスを「謝罪」によって立てながら、断る側の negative face を守るために「回避」を使用している。「回避」は「要求」の場から離れようとする意図を表すものである。そのために「断り」においては、「断り」の意味をあからさまにいう「直接的断り」の代わりにも使用されている。①の学生は「回避」によって間接的に断り、「直接的断り」のような断る側の negative face を守る効果を得られたと思われる。

②の学生も①の「断り」のように、初出に後輩の positive face を考慮して断り初めている。しかし、②の先輩は断る側の negative face を守るために「理由」によって断り終えている。「理由」はもともと相手に「断り」を分かってもらおうと働きかけるものである。しかし、ここでは、自分の領域(「詳しくない」)を表しただけで、自分のことをわかってくれることを望んで用いたとは思われない。形式としても「別に」という「遠慮の言葉」に多く使用される表現からも見られる。

5．まとめ

「断り」は断る側が自らの negative face(依頼に添えずに自由にいたい・応じたくない)に働きかけた negative politeness である。しかし、negative politeness という「断り」には断る側の negative face を表す「意味公式 or ポライトネス･ストラテジー」以外にも､断る側の positive face、依頼者の positive face を補償するファクターが組み合わされている。その複雑な「断り」の分析のために、今回「断り」におけるフェイス複合現象の紹介、及びその必要性について考察してきた。その結果、以下のような「断り」のフェイス複合現象の活用性が見られた。

①「断り」の先行研究における「意味公式」の曖昧な分類がフェイス複合現象によって、より明らかな分類となる。

②先行研究における「意味公式」と「ポライトネス」の短絡的な同一化を解消できる。

③「意味公式」と「ポライトネスのフェイス」を関連付けて、言語構造と運用の両面を同時に説明できる。

④フェイス複合現象によって、「断り」発話に現れる断る側の意図が把握でき、ポライトネスの度合いが明らかになる。

今後、依頼者との諸関係である「親疎関係」､「年齢層の差」､「依頼内容の軽重」の変数と関係した「断り」、さらに母語話者と外国人学習者との比較などを設定し、フェイス複合現象の観点から分析することにより、フェイス複合現象の問題点などを見つけて補完していきたい。

＜注＞

1) Searle(1969)は、発話行為とは人間におけるコミュニケーションの最小単位であり、言葉を話すこと、陳述、命令、質問、約束、依頼などの発話行為を遂行することに一致すると述べている。
2) Beebe et al.(1990)、熊井(1993)、이해영(2003)、元(2003)、寥育君(2004)、 権(2006)など。
3) 日韓辞典(1973)　p．2189 を 引用。
4) 例 1 から 13 は権(2005)のデータである。このデータは 2003 年新潟大学生を対象に「談話ロール」によって調査が行われたものである。詳しくは権(2005)を参照されたい。
5) Grace(1976)は含意をある発話行為の中で特定の文脈から生じるもの(伝達意図)であると述べている。
6) negative face を守る行動である。詳しくは 2.3 節を参照されたい。
7) positive face である。 詳しくは 2.3 節を参照されたい。
8) Beebe et al.(1990)の Adjuncts of Refusals と似た項目である。
9) 元（2003：170）は Beebe et al.（1990)の意味公式で分析したが、Beebe et al.（1990)の意味公式をそのまま適用できない事例もあり、それを修正する必要があると考えられると述べている。
10) Goffman(1976:5)“An image of self delineated in terms of approved social attributes”と定義しており、フェイスとは、よりとされている社会的特性によって描かれている自画像であるが、自分を見栄え良くすることでその職業や宗教社会をよく見せるときのように、他者と共有していることもある。(Thomas, 1995:184)、B&L が定義した「フェイス(face)」の概念は、各文化における「面目」、「面子」、「顔」などの固有の概念と混同・誤解されているので、 ここでは「フェイス」に表記する。しかし、下位分類の **positive face** と **negative face** は英語で表記する。
11)「FTA の見積もり度」とも示す。
12) Tomas(1995)は「言われることに多大な期待がかけられているために、言わないでおくこと自体が非

常に大きな FTA になる」場合もあると指摘している。
13）①～⑤は宇佐美(2002)、寥(2004)、権(2005)を参考。
14)「断り」の意を表に表す「直接的断り」を示す。
15)「semi」という概念によって、人間の持っている semi face が、positive face や negative face とは異なって、不完全な、片側のフェイスを示すことではないことを断りたい。本稿における semi face とは一つの発話の中における全体のフェイスに positive face と negative face が半々入れ混じっていることを示し、semi face は他に「complex face」、「dual face」、「alternating face」としても捉えてよい。
16）selfish-face とも示す。

＜参考文献＞

元智恩(2003)「断わりとして用いられた「ノダ」－ポライトネスの観点から－」『計量国語学』第 24 巻 1 号 計量国語学会　pp.1-18

宇佐美まゆみ（2002）「ポライトネス理論の展開」『言語』Ｖol.31、No.1～Ｖol.31、No.13 大修館書店

生駒知子・志村明彦（1992）「英語から日本語へのプラグマティク・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79 号　pp.41－51

熊井浩子（1993）「外国人の待遇行動の分析（2）－断り行為を中心にして－」『静岡大学教養部研究報告』第 28 巻 第 2 号 pp.１－37

権英秀（2005）「断りから見た日・韓両言語の比較研究」新潟大学修士論文

———(2007a)「日･韓両言語の初出マーカー」『日本学報』第 70 号　韓国日本学会

———(2007b)「日本人の大学生と高校生の『断り』表現－年齢層の差によるポライトネスを中心に－」『日本語文学』第 34 集　大韓日語日文学会

任炫樹（2003）「日韓両言語における断りのストラテジー－言語表現の違いとストラテジー・シフトを中心に－」『ことば』24　現代日本語研究会　pp.60-77

療育君(2004)「日本と台湾における断り表現の対象研究」新潟大学修士論文

Beebe, L. M., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R.（1990）“Pragmatic Transfer in Refusals.” In R.C.Scarcella,E.Anderson & S.C.Krashen eds.）, *Developing Communicative Competence in a Second Language*. NewYork : pp.55-73, Newbury House Publishers.

Brown, P. & S. C. Levinson（1987）*Politeness : Some Universals in Language Usage*.Cambridge ： Cambridge University Press.

Goffman, E.（1976）“Replies and Responses.”*Language in Society*. Vol.5Cambridge University Press.

Miriam E. ＆ Bodman. J.（1993）“ Expressing Gratitude in American English ” *English Teaching* 49.

Olshtain, E. & A. Cohen(1993) Apology: A speech-act set. In Wolfson, N. & Judd(Eds) *sociolinguistics and language acquisition*. Rowley, MA; Newbury House

Searle, S. C. (1969) *Speech Acts*: *An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge:

Cambridge University Press. 坂本百大･土屋俊訳(1986)『言語行為-言語哲学への試論』勁草書房

Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction : An Introduction to Pragmatics*. London:Longman.

浅羽亮一監修、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳（1998）『語用論入門－話 し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社

이해영(2003)「일본인 한국어 고급 학습자의 거절 화행 실현 양상 연구」『한국어교육』 第 14 巻 2 号 한국어학회 pp.295-326

主指導教員（福田一雄教授）、副指導教員（山崎幸雄准教授・藤石貴代准教授）